

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

「水牛と牛の家畜銀行」 始まる



ラオスチーム 中野真理子

水牛はマルチな働き者

のどかで平和な農村の風景につきものの水牛はのんびりのほほんとしたイメージだが、しかしどっこい働き者である。田畑を耕すトラクターであり、モノや人を運ぶ小型トラックであり、また米不足や家族の病気などでお金が必要なときは売って役立つ貯金でもある。結婚式などにはご馳走として皆の胃袋も満たすこともあるそうだ。また牛は、日本のように手をかけて高く売るといようなことはないが、育てば肉牛として売って現金収入を得ることができる。こういった家畜は放牧しているため、えさ代はいらないばかりでなく、その大量の糞は天然の肥料にもなる。最近では一歩進んで、堆肥作りの原料としても使われる。という具合で、自然のままでもかくも人の役に立ってくれるありがたい家畜なのである。

今年、地球の木ラオスチームでは、少しでも会員の皆様に見える形での支援をしたいと考え、今までは特に細かく指定しなかったJVCへの支援金を水牛と牛の家畜銀行に充ててもらふことにした。今回の支援は、家畜やトラクターを持たない農家にメスの水牛や牛を1頭貸し出して一定期間預け、子どもを殖やしたら、親牛を返してもらおうというもの。子牛はその家のものとなる。この家畜銀行は森林保全や村人の生活の安定をめざしたJVCラオスプロジェクトのなかで、今年から開始する具体的な活動のひとつである。

水牛などを持たない貧困層の農家では、田おこしにトラクターを借りるとしても、順番待ちなどで農作業の時期を逸してしまったり、また借り賃やガソリン代などの経費もかかるので、村人もトラクターより水牛を欲しがるといふことだ。

地球の木で支援した水牛や牛がラオスの農村で、どんどん数をふやして村の人たちの役に立っているところを想像すると、ラオスの村がぐっと身近に感じられるのではないだろうか。

CONTENTS

- 「水牛と牛の家畜銀行」始まる ……1
- 声なき人々の声を聴く ……2
- 久しぶりだねネグロス ……3
- 進む！地球の木のフェアトレード ……4~5
- エネルギーを選ぶことは、生き方を選ぶこと！？ ……6
- ソーラーケーキ工房を訪ねて ……6
- 気仙沼だより その2 ……7
- 活動日誌 ……7
- INFORMATION ……8



JVCラオスのスタッフと村の篤農家を訪ねる

この家畜銀行のスタートは少し先になるが、今後はこの活動を通して見えてくる村の暮らしを、随時報告していければと思っている。

支援は村人参加型で

昨年末、ラオスの現場に行き、JVCと村人たちの活動を見てみると、結局この村の問題を解決するのは村の人々でしかないと感じた。そのためには村人たちのニーズを的確に把握し、村人たち主体の仕組みができ、進めていけるかどうか重要である。

先日JVCラオスの現地代表だった平野さんがその任を終え、帰国されたのでそのお話を伺う機会をもった。そのなかで印象的だったのは、JVCが伝えようとする新しい技術を広める場合でも、村人たちはうまくいかない場合のリスクを考え、簡単には飛びつかないという。そのため村の中でモデル農家を作って実践事例を広く紹介したり、時には成功事例から学ぶために、他の地域へのスタディツアーを行ったりする。そうした互いの経験交流からあらたな工夫が生まれたりすることもあり、村人同士の学び合いにより実践者が増えていくという。こうして、その土地や風土にあったやり方に変わっていく。

この参加型のプロセスが象徴しているように、支援する側の価値判断を一方向的に持ち込むのではなく、村人たちが自分たちで消化、選択しながら、協力し合って問題を解決していくことで、初めて何かが変わっていくのであろう。そのためのきっかけなり環境なりを支援を通じて提供していくという方法をJVCは採っているのである。

地球の木は時間がかかるこの地道な活動を応援しながら、「はて、それでは私たちの暮らしは？」と私たちの社会を問い直し、未来への選択につながる「新しい豊かさ」を探していけたらと考えている。



声なき人々の声を聴く

ロシラハールは、高校生にとっても自己表現の場

ネパール・マンガルタール村で実施している「幸せ分かち合いムーブメント」の活動の一つに、季刊誌「ロシラハール」の発行があります。これは、これまで政治的に周辺に追いやられていた少数民族の声を発信し、「幸せ分かち合いムーブメント」のコンセプトを周辺の地域にも広げることが目的です。ネパールチームで「ロシラハール」を読む会を持ちました。

「ロシラハール」に込められた願い

「ロシラハール」の「ロシ」は、マンガルタール村を横切って流れる大きな川の名前。「ラハール」とは、さざ波、流れ、つながり、といった意味です。「ロシラハール」は、高校生や教師をはじめとする普通の村人たちに、意見を発表する場を提供することで書くことへの意欲を高めています。また、幸せ分かち合いムーブメントの波が人から人へと伝わり、次第に大きな流れになるようにとの願いがこの名前にこめられています。2008年の創刊から年に3~4回発行されており、現在では発行部数700部、村の内外で広く読まれています。

「知りたい」思いが実現

このように、マンガルタール村の人々にとって大きな意味をもつ「ロシラハール」ですが、すべてネパール語で書かれており、ネパール語の「非識字者」である私たちには読むことができません。現地コーディネーターのサルバジットさんが各記事の題名を英訳して下さいましたが、ネパールチームではもっと詳しく内容を知りたいという思いが募っておりました。ついに本年6月18日、事務局近くのネパール料理屋さん「スングバ（蘭の花の意味）」のご主人

タパさんにご協力いただき、その一部を翻訳していただきながら読むことができました。



ロシラハール 10~12号

子どもの権利と参加

今回はその中から「ロシラハール第11号」の一つの記事をご紹介します。題名は「子どもの権利と子どもの参加」。執筆者はサドゥラム・ラナマガルさん（小学校の副校長）です。初めに、1989年にユニセフによって提起された子どもの権利条約の紹介があり、

1. 子どもは保護されるべき存在であること、
2. 暴力を受けてはならないこと、
3. 健康が守られ教育を受ける権利があること、
4. 子どもは社会に参加し意見を述べる権利があること、が記されています。

次に、「子どもの参加」について、村の日常にあわせて具体的に説明しています。第一に、子どもが家族内での話し合い（何を着るか、何を勉強したいか、休日はどう過ごすかなど）に参加すること、第二に、学校における参加（運動会などの行事に関する意見を述べるなど）、第三に、地域活動への参加（道路作り、非識字者に文字を教えるなど）というように、子どもが関わる場ごとでの参加の具体例が記されています。

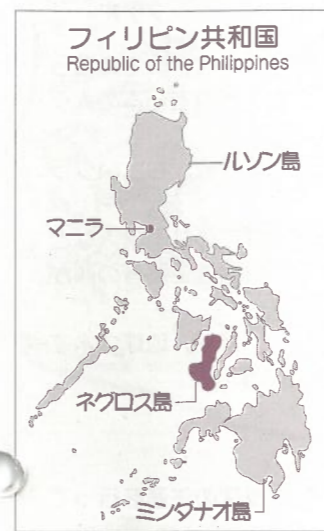
「ロシラハール」に学ぶ

また、子どもの成長のためには、何よりも「愛されること」が重要であり、愛されるためには、子どもたち自身が清潔にすること、丁寧に話すこと、兄弟や友達と仲良くすること、困った時には助け合うこと、が必要であると言っています。さらに「よい大人」になるために、うそをつかない、盗まない、けんかしない、悪口をいわない、目上の人を敬う、差別をしない、といった道徳的な教えが並んでいます。子どもの権利は世界中で共通するものですが、日本では、子どもが中心である家庭が多い（食事の内容や余暇の過ごし方の決定など）半面で、地域活動に子どもはほとんど参加していないといった違いがあるように思います。一方で、どこにおいても子どもは「愛されること」で成長するのであり、国を越えて、子どもたちを愛する大人社会をつくっていくことが大事なのだと気づかされます。

これからも最新号が届くごとに「ロシラハールを読む会」を開く予定です。マンガルタール村民キャンペーン参加者の方々をはじめ、ネパールに関心のある方など、どうぞご自由にご参加下さい。（ネパールチーム 磯野 昌子）

久しぶりだね ネグロス

~たうんチーム学習会（6/20）から~



地球の木のフィリピン・ネグロス支援は、2007年春に終了しましたが、その後ネグロスがまったく関係なくなったわけではありません。地球の木の出前講座やイベントでよく使用されるオリジナル開発教育教材「マジカルバナナ」は、主にネグロス島を舞台に作られたものですし、「マジカルシュガー・すごろく」もネグロス島を舞台にしています。そこで、ネグロスをもっと知ろうと、NPO法人「APLA」理事で、元地球の木副理事長であった廣瀬康代さんをお招きし学習会を行いました。

（なお登場する「日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）」は、2008年にNPO法人「APLA」となり、新たな体制で活動しています。そして地球の木は現在APLA団体会員となっています）

「ネグロスなにそれ？」という人のために

大まかにネグロス支援活動について説明しておきます。支援の発端は、1985年の砂糖国際価格の大暴落。砂糖の島ネグロスでは、農園主が砂糖キビ栽培を放棄、砂糖キビ農園で働く多くの労働者が失業し、その家族が飢餓に陥ったということでした。1986年、日本ネグロス・キャンペーン委員会（JCNC）が発足し、支援が始まりました。初期の支援は、緊急支援的なもので、その後、零細農民・漁民、スラム住民、砂糖農園労働者への支援から、砂糖農園労働者を主とした土地獲得や循環型農業での自立支援へと次第に収束していきました。最終段階は、それらの人々が家族単位で自立可能なモデル農家の育成支援（地球の木は「レッツ・ゴー・ファミリー」と名付けた）となりました。JCNCに協力し、地球の木が支援を始めたのは1992年、そしてモデル農家の自立への目処が立った2006年度、地球の木の支援は終了しました。

砂糖の島で「なぜバナナ？」

ネグロスには、シュガー・プランテーションはあってもバナナ・プランテーションはありません。それではなぜバナナかという、JCNCは「モノ」を通して支援地と連携したいという思いから、1987年ネグロスに、1989年日本にオルタ・トレード社を設立します。そして日本への交易品として選ばれたのが、ネグロスでは裏庭に生えていたような「バランゴンバナナ」でした。その購入者は主に生協組合員がなり、購入価格に生産者自立金を含むことで、バ

ナナ民衆交易が成立しました。その生産者はネグロスの山間地に住む零細農民です。

ネグロスの支援地以外の農園労働者

農園労働者も当事者となる農地改革法は、1988年に10年の期限で制定され、現在は2013年まで延長されているそうです。ということは、なかなか土地の解放が終了しないということでもあります。地主が土地の解放をしぶるのはもちろんですが、政府が地主から土地を買い上げる金がないということも影響していると思います。また農園労働者が土地所有の権利を得た後でも問題があります。日本のように小作が自作になるのとは違い、季節労働者のような農園労働者は、農業に対する知識もほとんどなく、政府の支援もあてにできないのです。結局、農園主側の合併企業型農園の計画によって、土地所有権を担保に合併企業の株主となり、すべてを親方農園主にまかせ「もとのもくあみ」となるケースが多いといわれています。

ネグロス支援地のその後

2006年度にモデル農家が集まり結成された「有機農民連合」は、定期的に寄り合いを行い連帯活動を続けています。ネグロスといえば「知る人ぞ知る」大橋成子さん（APLA フィリピン担当デスク）と、夫のフレッドさんが中心となり、2009年に農民学校（ルーラル・キャンパス）が開校されました。地球の木会報にも何回か登場した模範的モデル農家のカルロスさんが、学校の農場長に就任しています。学校では、闘争世代を親に持つ若者が、将来に夢を持てる農業経営をめざし、家畜の繁殖、野菜・堆肥づくり、マネージメントなどの研修を行っています。そして、農場の近くに市場建設の計画もあるそうです。またバランゴンバナナ交易発祥の地のバランゴンバナナ生産者（約700家族）は、1994年のバナナ病虫害発生後、いまだに完全回復とまでいかないようです。しかし複合農業に取り組み、「有機農民連合」とも協力関係にあります。

今後も、ネグロスをそして彼らの活動を見守っていきたいと思います。

たうんチーム 米林 大作（元フィリピンチーム）



進む! 地球の木の

「幸せ分かち合いクラフト」の素敵なパートナーたち

地球の木では、クラフトグッズの生産・販売を通して、アジアで困難な状況にある人々の自立支援をおこなっています。アジアには、長い歴史をもつ、素晴らしい伝統文化があります。中でもカンボジアやラオスで母から娘に何代にも渡って引き継がれてきた手織り、生活を彩る様繻やパッチワークなどの「手仕事」がもつ温かさには心ひかれるものがあります。地球の木は、現地の暮らしや伝統、文化を尊重しながら「手仕事」ならでの、ぬくもりのある「ものづくり」をおこない、それを日本の人々に届けます。

生産者の人たちも、購入する側の私たちも、双方が幸せな気持ちになれること・・・それが「幸せ分かち合いクラフト」です。

この秋から、各地のイベントや生活クラブデポの展示会、生活クラブ・福祉クラブのカatalogでの共同購入などで、地球の木のオリジナルシルクスカーフやバッグ、小物などの販売をおこないます。これらの製品は生産者の顔が見えるフェアトレード品です。

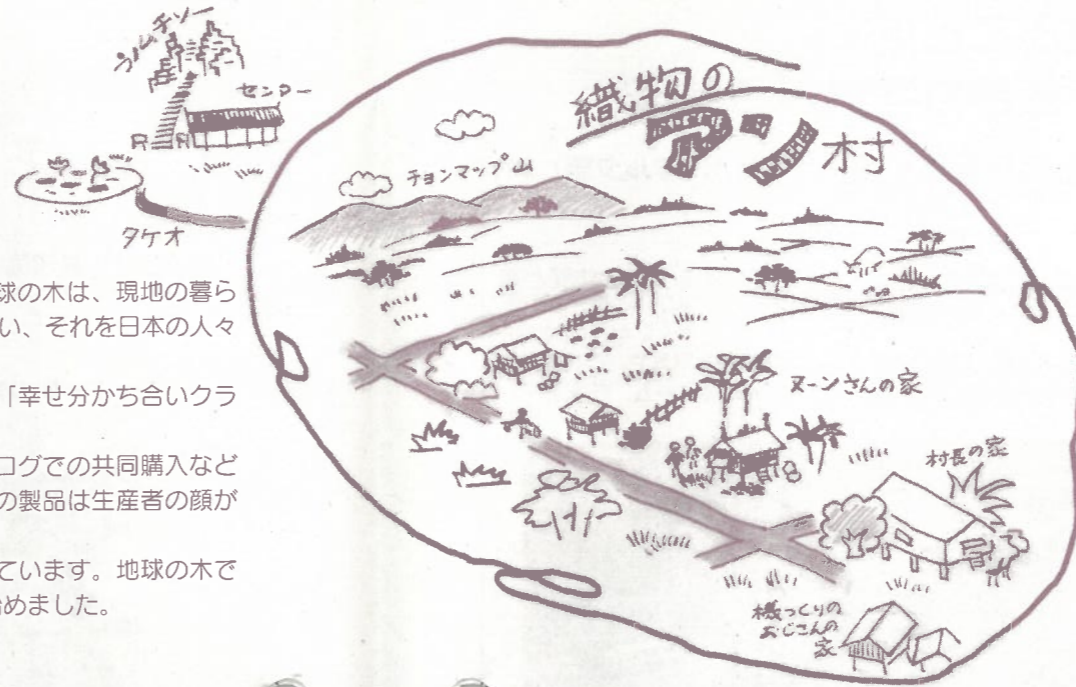
フェアトレードでは、できるかぎり自然素材や現地で入手できる素材を使うことを大切にしています。地球の木では、生産技術のレベルが高いタケオのアン村で、自然染色、手紡ぎのシルクスカーフの生産を始めました。

今回、素敵なクラフトグッズを作ってくれている生産者（パートナー）たちを紹介します。

「幸せ分かち合いクラフト」のパートナーは、以下の二つにわかれます。

1. プログラムパートナー（地球の木の海外支援プログラムの相手で、自立を目指してクラフトグッズの生産を行っている。）
2. フェアトレードパートナー（購入をすることで、生産者の暮らしを支えます。地球の木フェアトレード基準に照らし合わせ、生産者の様子や事業の状況についても調査します。）

（クラフトチーム 筒井 由紀子）



新しい生産地「タケオ州アン村」



「手紡ぎ」の糸 ～ゴールデンシルク～

カンボジアのもともとの絹糸は、カンボウジュ種という黄色の糸で、通称ゴールデンシルクと呼ばれています。カンボジアの長く続いた内戦で、このゴールデンシルクの養蚕は国内でほとんど途絶えてしまいました。タイ国境に近いバンテアイミエンチェイという村に内戦を免れたゴールデンシルクの養蚕の小さな村があるそうです。それ以外に、日本やフランスなどの支援でこのゴールデンシルクを復活させている団体がありますが、生産量はごくわずかです。それで現在カンボジア製の絹織物はほとんどがベトナムの工場生産の糸で織られています。

今回、ベトナム北部産の手紡ぎのゴールデンシルクが手に入ったので、このゴールデンシルクでヌーンさんに織ってもらうことにしました。

カンボジアの織物はクメールシルクと呼ばれ、世界の織物の歴史の中でも特別な位置を占めています。このクメールシルクの伝統を受け継ぐためにも、素材はカンボジアの流れを引く糸や、植物染料を使っていただけると考えています。



地球の木のクラフトグッズは、以下の場所でお買い求めいただけます。（詳しくは事務局までお問い合わせください）

1. 事務所の常設コーナー
2. 各イベント会場（インフォメーションでご確認ください）
3. 生活クラブ生協のお店（デポ）の展示会販売
4. 生活クラブ・福祉クラブのカatalogによる共同購入

2012年度から、地球の木の連絡担当のタリーさんの友人であるディナさん（アン村出身）の協力を得て、現在支援しているVCAO職業訓練センターから7キロほど離れたアン村で自然染色の生産技術・生活環境の調査をおこなっています。

アン村は、織物の村。村のほとんどすべての人々が織物に関わる仕事に携わっています。カンボジアは気候的に稲作は年2回できますが、アン村は池などの水資源に乏しく、稲作は1年に1回しかできないので、その分、村の人々は織物に収入を求めています。ここでは人々はカンボジアの伝統的なホールと呼ばれる緋を織っています。とても手の込んだ細かい緋の絹織物です。しかし、このところのカンボジアの急激な近代化で人々が洋風な衣服を着るようになり、このホールの需要も落ち込んでいるようです。生産者は、障害児の孫がいるヌーンさんという女性。

染色については、アン村では3年ほど前までは自然の材料で染めていたそうですが、政府が染め物に使う特定の木の伐採を禁じたこともあって、その後、急激に化学染料に移行してしまったそうです。ヌーンさんの家には井戸があります。しかし、ヌーンさんの話では、検査が入って、煮炊きには使えない水であることが判明したため、調理は雨水を大きな水瓶に貯めて使っている、とのことでした。環境に負担の少ないドイツの染料はとても高価なので、村の人々は比較的安価なベトナム製やタイ製の染料を使っています。化学染料による土壌の汚染が関係しているのかもしれませんが。

そこで、今回はまず、自然素材のラックカイガラムシのエンジ色のスカーフを依頼しました。媒染剤も日本からは持ち込まず、鉄釘から鉄媒染液を作り、また、現地では水をきれいにするために使われているサッチュウ（ミョウバン）を媒染剤として使ってもらいました。媒染剤を変えることにより、同じ染め材から違う色が得られます。その媒染による違いを横縞に表現したスカーフにしてみました。

（クラフトチーム 大藪 明恵）

プログラムパートナー

「VCAOタケオ職業訓練センター」



貧困家庭の少女たちに織り物を教えている職業訓練センター。地球の木は、看板やリーフレットを作ったりしたほか、米や糸を定期的に支援している。2011年度におこなったコンテストでは、全員が素晴らしい作品を仕上げた。ひとりひとりが自分で考えたデザインで織っているため、色々なデザインのスカーフが出来上がっている。

「Modern Dress Sewing Factory (MDSF)」



HIV陽性反応のシングルマザーたちの工房。免疫力が低下しているので、体力的にも普通の人たちのように働けない。差別や偏見を逃れて農村部から出てきた人たちも多く、同じ境遇の仲間たちと一緒に働けることが何より嬉しいという。薬は海外からの支援もあり無料でもらえるが、病院で薬をもらうためには手数料が必要。薬代と子どもたちの教育費が彼女たちの肩に重くのしかかっている。オリジナルのポーチやソックスカパーの生産を依頼している。

フェアトレードパートナー

「Peace Handicraft」



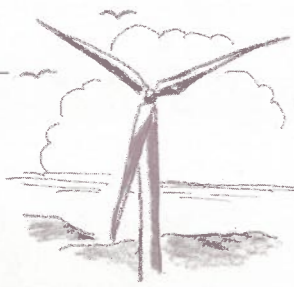
カンボジア プノンペンにある、地雷やポリオ、交通事故などでハンディキャップを持った人たちの工房。生産者の人たちが差別や偏見に負けず、社会の中で暮らしていけるよう、シルク製品などの生産・販売をしている。デザイナーでもあり、全体の技術指導をしているのは代表のYek Hongさん。オーストラリアでデザインの勉強をした経験がある。指導はかなり厳しいが、その分、製品の品質も高い。日本の着物が気に入る。オリジナルのシルクバッグやカードケースなどの生産を依頼している。

「シビライ村のモン族の女性たち」



ラオス・ピエンチャンから車で3時間ほどのシビライ村。田島征三さんが地球の木と共に製作する「ラオス森の絵本」（仮）の取材でラオスへ行ったときに通訳を務めてくれた安井清子さんが支援するモン族の村。生産者の女性たちは、農作業の合間をぬってモン族の伝統的な刺繍製品を作っている。

ここで作られる刺繍品は同じものがひとつもなく、色合いも様々なところが最大の魅力。自給自足の農村だが、不足する米などを補うためにも貴重な現金収入となる。



エネルギーを選ぶことは、 生き方を選ぶこと!?

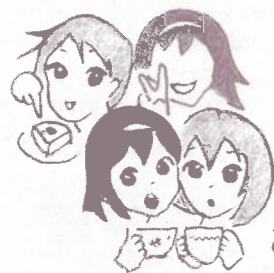
=生活クラブ風車建設・稼動記念イベント(6/30オルタ館)=

秋田県にかほ市に建設され、この4月から稼動、首都圏の事業所へグリーン電力の供給を始めた「生活クラブ風車・夢風」この、市民によるエネルギー自治への一歩を祝うイベントは、丸一日を費やす盛りだくさんのものであった。式典、脱原発・復興支援フォーラム、記念ライブと続いた。会場は熱気を帯び、皆どこか嬉しそうであった。

地球の木も賛同グループの一つとして出展した。キーワードは「シンプルライフのすすめ」。ブースには太陽熱で焼いた丸や四角のソーラーケーキがゆったりと並び、後ろには「ネパールの村の循環型の暮らし」や「アジアと日本の原発について」のパネルも展示した。異彩を放つケーキは完売。子連れの人ややって来て「夏休みの工作にどうかしら」と、ミニチュアのソーラーオーブンを観察したり、自分の“ソーラー体験”を熱弁する人がいたり、なかなかの人気であった。フォーラムの最後

に16の参加団体がアピール。地球の木も多くの仲間と連携しているのだと実感でき、心強く思った。

グリーン電力：自然エネルギーで発電された電気や、これを選んで購入するしくみ。(会報作成チーム 斎藤 和子)



ソーラーケーキ 工房を訪ねて

ある晴れた日の午後、
地球の木女子4人が鎌倉

に集結、会員Y氏のお宅を訪問した。Y氏は3年半ほど前から太陽の熱を利用したソーラーケーキづくりをしている。ソーラーケーキとは、型に入れたケーキの材料を太陽の熱に当て、天気の良い時期は1日で、不安定な時期は3日ほどかけじっくり焼き上げる、太陽まかせのケーキなのだ。海の見渡せるY氏宅のバルコニーではその日、見覚えある物を組み合わせて作られたお手製のソーラークッカー装置2台が太陽に当てられ、その上でケーキが焼かれている。私たちは目を丸くして話に聞き入った。

装置は、内側に天ぶらガードを張ったベニヤ板を箱形に角度を付けて組み合わせ、太陽光が真ん中に集まるように設計。熱を逃がさないために、上に透明なビニールのテーブルクロスをカバーとして使う。ケーキ型のまわり全体は黒く塗り、型を覆うアルミ箔も黒く塗る。熱さはY氏曰く、「触ってあちっ!っていう温度」と。実際は熱くて触れない程であった。ちなみにこの装置で細い焼き芋もやけるのだとか。この日は朝9時半から焼き始め、既に2個のケーキが出来上がっていた。早速味見と皆姿勢正しく着席し、庭でとれたばかりのハーブティーと共に、テーブルにケーキが並び役者が皆そろった。そしてケーキ入刀。数日前に出来上がったソーラーケーキも次から次にテーブルに登場。その度に悲鳴は上がらなかったが、あらまあと遠慮がち

に言いながら、急ぎテーブルのスペースをあけた。

並んだケーキは、梅酒の梅たっぷりのケーキ、蜂蜜漬梅干しケーキ、色にこだわった人参、オレンジケーキ、甘さを抑えたバナナ、カカオマス、クルミのケーキ4種類。どれも身近で手に入る国産の材料が中心。マーガリンを塗ったアルミを型に敷き、トッピング用の具を並べ、生地を入れてじっくり焼く。完成後型をひっくり返し皿にのせるので、見た目にも美しい。食べた瞬間の歯触りはどれもしっとり、香り豊か。底の部分(ひっくり返す前は上部)は熱に直接当たる部分なので程よい固さで、市販にも負けない食感がある。太陽相手に突然の雨や日数のかかる冬場は大変だとY氏は言う。また装置の角度が固定式なので太陽の動きにあわせて装置本体を動かさなくてはならないのも苦労のひとつだ。

味の感想を皆に聞くと、口をもぐもぐさせながら口を揃えて梅酒の梅入りケーキが絶品よとの答え。ハーブティーをすすり一息つくと、梅干しも意外に美味しいわと。太陽の下、どこにでもある道具で自然にこだわった材料を混ぜるだけで作るソーラーケーキ。午後いっぱい美味しい談議はつづいた。

(ホームページチーム 藤井 牧子)

(これは地球の木ブログからの抜粋記事です。全文はHPをごらん下さい)

地球の木 検索

気仙沼支援報告

気仙沼だより その2

皆様からのあたたかい御支援があって、2012年7月9日に無事NPO法人としての登記を終え、7月11日より特定非営利活動法人Tree Seedとして新しいスタートを迎える事となりました。

現在Tree Seedは、ボランティアさんが利用できるゲストハウスの運営、仮設住宅に設置されているトレーラーハウスの管理、運営業務、ボランティアツアーのコーディネート、アーカイブ事業、高齢者お茶飲みサロンの運営等を行っています。

私が担当させて頂いている「ポプラの木」も多くの皆様からのご支援により、かねてからの自分の夢でもあった「デサービス」の開設も目前となってまいりました。現在は地域の高齢者のお茶飲みサロンとして「ポプラの木」に来て下さる皆様と一緒にお茶飲みをしながら書道、足湯、カラオケ、絵手紙、体操、折り紙、手芸、畑、等々地域のおじいちゃん、おばあちゃん達が生きがいを持った生活を送る事が出来るよう、楽しみを持ちながら過ごしていただけるようなプログラムを行っています。

初めは少なかった利用者さんも今では多い時で10人以上みえる時もあり、「こういった場所は必要だよ」「楽しい」「また来るね、ありがとう」「友達も誘ったからね」といった声を聞くたびに嬉しくなります。

震災の影響で外出をする機会が減った事、他者とのコミュニケーション不足、ストレス等で様々な心身状況の変化がみられる中、「歩けなくなった」「物忘れがひどくなった」といった声も多く聞かれています。震災以前より気仙沼は高齢化率が高まっています。

「痛いところが出るのは若い時沢山働いた証だだと思います。これからは私達が一生懸命働く番なので少し遊んで下さい、私達に勉強させてくださいね」と言う、皆さん「なんと~ありがたいや、若い人から刺激をもらわなきゃ」と言ってくださり、笑顔になってくれます。

「ポプラの木」を利用することによって一人でも多くのおじいちゃん、おばあちゃん達がいつまでも若く、健康でそして笑顔になってくれたらいいなと思う毎日です。

活動日誌(6月~8月抜粋)

6月	9日	デポー展示会(東戸塚デポー)	19日	第2回理事会
	16日	出前講座(鎌倉女学院高校)(真光寺中学校)	26~27日	気仙沼訪問
	20日	たうんチーム勉強会「ネグロスの今を聞く会」	28日	ネパールエコツアー説明会
	22日	第1回理事会	30日	たうんチーム「砂糖の勉強会」(黒糖茶房)
	24日	中高生のためのボランティア・ナビ参加(マジカルバナナ紹介)	31日	出前講座(横浜隼人高校)
	27日	ラオス報告会(県民センター)	8月	
	30日	生活クラブ風車「夢風」建設記念イベント参加	4~5日	開発教育協会 全国研究集会参加
7月			8日	プログラム連絡会
9~17日		カンボジア・ラオス訪問	29日	第3回理事会
10日		NGOスタディツアー合同説明会(洗足学園中学校)		

*この他、各チームミーティングが開かれました。



自分たちで描いた絵手紙を手にするポプラの木利用者の方々(7月26~27日、地球の木のメンバー12名が被災地及びTree Seedの活動現場を訪問しました。)

9月からは介護予防のデイサービスが始まりますが「初心を忘れず」をモットーに前に進んでいきたいと思えます。

2011.3.11あの日から人生が全て大きく変わりました。29年過ごしてきた自宅が無くなり、大事にしていた物や思い出、いつも可愛がってくれた叔父も失いました。けれども私は大事な物も見つける事が出来ました。

あれからこの狭い気仙沼という場所で何人の人と巡りあった事か...

そしてその人達から貰ったものはとても温かく「ありがとうございます」の一言じゃ足りない位多くの事を頂きました。

自宅のあった場所へ行ってみると整地がされ始め子どもの頃に遊んだ場所や毎日歩いた道等を思い出す事も出来なくなっています...きれいな街になるのはまだまだ時間がかかると思えます。

何も無くなってしまおうと記憶も薄れていくのか悲しい気持ちにはなりますがそれでも決して悪い事だけではなく、皆さんに出会えた事、Tree Seedのメンバーと出会えた事は幸せな事で、楽しい毎日を送ることが出来ています。

2011.3.11の出来事は個々に思う事、感じる事は違いますが、私は無くした思い出の分をこれからつくっていくというスーパーチャンスを与えてもらったと思っています。

「地球の木」の皆さんから頂いた大事な種を育てながらいつかは大きな木のようになれるよう、皆様の様に温かい団体となれるよう、私たち一同、日々精進していきたく思っております。 Tree Seed 副理事長 吉田 朋子

地球の木カレンダー2013 「大地にうたう」

子どもたちのどの写真にも、土の匂いや大空の広がり、吹き抜ける風、潮の香りも森の鼓動も一緒に写っていて、写真家の長倉洋海さんは、「大地にうたう」というタイトルが自然に浮かんで来たと言います。

子どもたちが歌う時、大地が声を返してくれる、「大地にうたう」は、そんなカレンダーです。

写真：長倉 洋海 (アジアの写真14点)
 サイズ：28cm×38.5cm (使用時56cm×38.5cm)
 印刷：オールカラー、環境保護印刷
 日付が大きく見やすい。書き込みがしやすい
 前月と翌月のカレンダー付き。「月の満ち欠け」を表示
 制作・販売元：日本国際ボランティアセンター (JVC)

※FAXでご注文の方は、同封の申込み用紙をご利用ください



ひらつか市民活動センターまつり

日時：9月30日(日) 10:00~15:00
 場所：ひらつか市民活動センター

市民活動やボランティアを行う57団体が大集合。「来て見て発見！市民活動っておもしろい」をテーマに開催します。

日頃の活動の展示やパフォーマンス、バザー、喫茶などがあります。

グローバルフェスタJAPAN2012

Think Global, Think Green:世界を変えよう。未来をつくろう。

日時：10月6日(土) 7日(日) 10:00~17:00
 場所：日比谷公園(地下鉄丸の内線・千代田線「霞ヶ関」、地下鉄日比谷線「日比谷」徒歩2分、JR「有楽町」徒歩8分)

国際協力活動を行っている政府機関、NGO、企業などが一堂に会する国内最大の国際協力イベントです。

地球の木は「チヂミ」と支援地のグッズ販売をいたします。

よこはま国際フェスタ2012

日時：10月20日(土) 21日(日) 10:30~16:00
 場所：みなとみらい象の鼻パーク
 (みなとみらい線「日本大通り駅」徒歩5分
 JR/横浜市営地下鉄「関内駅」徒歩15分)

今年は「アフリカと友だちになる」「世界の貧困をなくす」「外国人とともにすみよいまちをつくる」「すべての人の思いをこめて」の4つのテーマで開催します。

開港150周年を記念して整備された象の鼻パークで世界のフードや楽しいプログラムが催されます。

地球の木は、フェアトレードのグッズを展示販売します。

各イベントでは、お手伝いしていただける方を募集しています。事務局までお問合せください

フォーラムアソシエーション文化祭

日時：10月27日(土) 10:00~15:00
 場所：オルタ館 (JR/横浜市営地下鉄「新横浜駅」徒歩7分)

フォーラムアソシエは、あなた発のネットワークづくり応援団です。地球の木は、「アジアの手仕事展」を開催します

鎌倉国際交流フェスティバル

日時：10月28日(日) 10:00~15:00
 場所：高德院(鎌倉大仏) (江ノ島電鉄「長谷駅」徒歩7分)

高德院境内で行われる鎌倉を中心に活動している国際交流団体のフェスティバルです。

地球の木は活動紹介、アジアのコーヒーとグッズの販売をいたします。

秋のデポー展示会

10月13日(土)	東戸塚デポー
10月15日(月)~16日(火)	南林間デポー
11月 8日(木)~ 9日(金)	のぼりとデポー
11月16日(金)	大丸デポー
11月21日(水)~22日(木)	らいふたうんデポー
11月28日(水)	つなしまデポー
12月 1日(土)	東戸塚デポー
12月 7日(金)~ 8日(土)	日限山デポー
12月10日(月)~11日(火)	霧ヶ丘デポー

各日11:00~19:00開催です。お近くの方は是非お越しください。地球の木カレンダーの販売もしております。クリスマス・年末年始用にプレゼントラッピングもいたします。

地球の木は「認定NPO法人」格を取得しました

2010年7月16日以降のご寄付に関しては、皆様が確定申告で寄付金を所得控除できるようになります。また、神奈川県と横浜市の個人住民税からも控除となります。